エミール・ゾラの結婚観について

森田 陽子

はじめに

『人はどのように結婚するか』という記事は、ゾラが19世紀の結婚に関する問題点をまとめたものである。ゾラは、1870年代から1880年代前半にかけて、特に多くの記事を寄稿しており、そのなかには当時の風俗のスケッチも多く含まれている。タイトルの通り、当時の人々の結婚について書かれた記事では、最初に当代の結婚の問題点を挙げたあと、経済的な階層別（貴族、有産階級、中産階級、労働者）に、ごく短いものではあるが小説仕立てにしながら、ゾラが考えるそれぞれの階層における結婚の一般的な顛末とその後を描いている。本稿では、この記事を中心に、1870年代後半から1880年代前半のいくつかの記事で補足しながら、結婚や夫婦生活、また子どもとの関わり方についてのゾラの見解を探ってみたいと思う。

1．ビジネスとしての結婚

19世紀の結婚の問題点として、まずゾラが挙げているのは、結婚がビジネスの一種になってしまっている点である。現代では、次々といろいろな機械が作られて、人の手足となり、あるいは人の代替となって仕事をする。あらゆる産業に入り込んだ機械に、何もかもが支配されてしまっているのだ。子どもを作る機械があればいいのに、と嘆く実業家を見た、とまでゾラは言う。ゾラの定義する現代人とは以下のようなものだ。

> 忘れてはならないのは、現代人は、様々な活動を持ち、外で生活し、自分の財産を維持し、増やす必要に迫られ、知性はたえずわきあがる諸問題に占領され、肉体は毎日の戦いによる疲れで気力を失い、彼自身が、うなりをあげて作動中の社会という巨大な機械の歯車そのものになってしまっているということだ。彼には愛人がいるが、それも人が馬を持つのと同じで、運動のためである。彼

が結婚するとしたら、結婚が他の操作と変わらぬ一つの操作になったからであり、子どもを持つとしたら、妻がそう望んだからである[1]。

ゾラがここで描いているのは、財産を維持し、また増やすことだけしか念頭になく、知性と呼べるものも、日々の雑事に消耗してしまった男の姿である。18 世紀末から第二帝政まで、戦争や動乱が相次いでいた時代の男とは違い、この男の戦いは、もっと卑小で、もっぱら自分の財産を守るためのエゴイスティックな戦いである。こうして、日々の生活と仕事に疲れきった男は、愛人や、結婚に対しても非常にドライで、冷めきった態度である。もし彼が結婚するとしたら、それは仕事上、必要な「操作」だからであり、その他の理由からではない。実証主義に支配されたこの時代においては、愛さえも「実証的」であり、まるで証券取引所での取引のように、やっつけ仕事で片付けられる案件に成り下がってしまっている[2]。

ゾラによって、「操作」あるいは「取引」と呼ばれる 19 世紀の結婚において、取引される対象は娘たちである。結婚とは、維持していくべき財産を持つ人々にとっては、まさにビジネスである。その契約は、その他の契約と同じプロセスを経て結ばれる。つまり、他の物件と比較し、条件をよく検討し、条件が折り合えば契約は成立し、すみやかに物件の引き渡しを行うのである。そこに、「愛」や「快楽」といったあやふやなものは介在しない。たとえば、この記事の中でゾラが描く貴族の結婚を見てみよう。貴族の章では、キャリアのためにそろそろ結婚を考え始めるマクシム・ド・ラ・ロッシュ=マブロン伯爵という青年の元に、叔母のビュシエール男爵夫人がアンリエット・ド・サルヌーヴ嬢との縁談を持ってくる。

財産はかなりのもので、ノルマンディの古い貴族、お互いに完璧に条件に合う。そして、彼女はこの結婚がきちんとしたものであるという点をよりどころとする。世間の要請にこれ以上に満足に応えられる結婚相手は見つけられないわよ。これなら誰もが納得する結婚になるわ。マクシムは愛想の良い様子で肯いた。確かに、どの点もとても良識にかなっているように思える。家名は釣り合って

---

[1] « Comment on se marie » in Emile Zola, *Œuvres complètes*, publiées sous la direction de Henri Mitterand, Nouveau Monde éditions, 20 volumes, 2002-2008, t. 12, p. 715. (以下出典はすべてこの全集からとし、巻数とページ数のみを記す)

[2] *Ibid.*

いるし、財産も遜色ない、外交官の職につくことを目指し続けるなら、こうした調和はきわめて貴重に見える[3]。

ここで検討されているのは、もっぱら取引としてどれほどの利益と妥当性があるかということであり、肝心の相手の性格や人柄はおろか、どのような容貌であるかさえ関心を払う人間はいない。また、「この結婚がきちんとしたものであるという点をよりどころとする」「世間の要請を満たす縁談」といった言い方を重ねることで、ゾラはこの結婚が世間体ばかりを気にして決められているという面をことさら強調しているようにも見える。この会話においては、結婚相手として検討される娘はひとりの人間としては登場せず、もっぱらその条件だけが問題となっている。マクシムやビュシエール男爵夫人にとって結婚相手はひとつの物件であり、商品でしかない。

2．新品の状態で引き渡される娘

そもそも貴族の娘は、縁談の相手だけでなく、自分の親からさえも、商品として扱われているのだ。その点について、『社交界の女たち』という記事で、ゾラは次のように述べている。

原則は、夫の腕に処女の娘を完全にうぶな状態でゆだねる、ということである。純粋さが保証付きで引き渡される商品なのである[4]。

娘というのは、結婚する時点で商品として「キズモノ」でなく新品であれば良し、とし、結婚させた後のことは考えないという点を、ゾラは別の記事においても述べている[5]。

娘たちをモノ扱いして取引することばかりでなく、ゾラは両親が「うぶ」、「純潔」という点にばかりこだわることにも憤りを隠せない。なぜなら、行き過ぎた純潔は無知を招き、無知は結婚生活においてさまざまな障害を生みかねないからである。『ブルジョワジーにおける不倫』でも、ゾラはそのことを糾弾していなかっただろうか？　この記事においてゾラはブルジョワジーの不倫をいくつかのパターンに分類した上で分析している。そして、その中のひとつである「愚かさによる不倫」では、ずっと家に閉じ込められて育ち、世間のことは何も知らせずに嫁に出された娘が、結婚後、なんら罪悪感

[3] Art. cit., t. 12, p. 717.
[4] « Femmes du monde », t. 10, p. 855.
[5] « Comment on se marie », t. 12, p. 716.

を抱くこともなく不貞を働いてしまう。彼女があっけなく不倫してしまうのは、そもそも貞淑という概念を知らないために、不貞がどういうものかも分からないからである。そしてその原因をゾラは、「環境による愚かさからくる過ちと両親の奇妙な貞淑の概念[6]」であるとしている。「奇妙な貞淑の概念」とは、娘をまったく何も知らない状態に置いておくことに他ならない。このような概念を持った親に育てられることが結婚生活において様々な問題を引き起こしている。

「貞淑」「不貞」といった概念ばかりでなく、結婚の実際面についても、無知は問題を生じさせる。性について何も教えられていないまま結婚させられた娘は、結婚初夜になって初めて直面する現実にうまく対応できず、恐怖を感じるだけだからだ。とりわけ上流階級の結婚についてゾラが強調するのは、この点である。すでに紹介したマクシムの結婚相手アンリエットは、初夜の後、以下のような感想を抱いている。

> ああ！　なんとおぞましいこと！　どうしていままで誰もこのことを教えてくれなかったの？　こんなことなら結婚などしなかったのに。この結婚という強姦、つまり長く続いた厳格な青春と何も知らない状態からこの乱暴な通過儀礼に至ったことは、取り返しのつかない不幸で、もはや慰めなどないように思える[7]。

あまりに唐突で、何も知らない花嫁にとって、この初夜は強姦にも等しい。そもそも功利的な結婚の契約によって結ばれただけで、ゾラによれば上流階級の3分の2は見ず知らずの他人同士と結婚させられている[8]。彼らはお互いのことをほとんど知らない上、結婚した夜のこの恐怖は、ふたりをますます引き離す。その後もふたりは心が通じることはなく、夫婦はまもなくバラバラの生活を送ることになるのである。

3．教育の弊害と夫婦の不和

しかし、ゾラによればこれもまた、19世紀の教育の弊害の一つである。女子の教育における問題点はすでに別稿で取り上げたので[9]、ここでは詳しくは

---

[6] « L'Adultère dans la bourgeoisie », t. 11, p. 777.
[7] « Comment on se marie », t. 12, p. 719.
[8] « Femmes du monde », t. 10, p. 856, « Types de femmes en France », t. 8, p. 764.
[9] 「ルゴン=マッカール叢書における女子教育の人格形成への影響について」、『仏語仏文学研究』、第34号、東京大学仏語仏文学研究会、2007、pp. 73-95。

述べないが、要点は次のようなものだ。男は、社会で活躍するために、専門的な学校へ行き、科学の進歩を享受して、最新の学識を身につける。それに対し、女の教育は、寄宿舎であれ、公教育であれ、家庭教師を雇ったとしても、表面的な知識を浅くさらっただけのものにすぎない。こうした問題があるゆえに、結婚する時点で夫婦間には教育による溝が開いている。その溝がこの乱暴な初夜によってよみがえる。

> 多くの夫婦の不和には、夫と妻が遅からず再開するこの離れ離れの生活には、ほとんど必ず初夜の憤慨と嫌悪が関わっている。あてあずっぽうに結びつけられたのだから、実験がうまくいかないのも当然だ。奥様と旦那様には共通点がないのだ。ふたりは互いにあまりに遠いところで育っており、決して通じ合うことはないだろう[10]。

夫は外で仕事、妻は社交に明け暮れるというふたり別々の生活を送る状態は、ゾラが問題視する結婚の典型だ。つまり、まったく違う教育を受けた他人同士が、もっぱら利益によって結び合わされ、結婚後は互いに独立した生活を持つという嘆かわしい不和（désunion）の状態が、19 世紀の結婚には蔓延している。

しかし、こうした夫婦の不和は上流階級の人々ばかりでなく、勤め人の中流階級にも見られる現象だ。たとえば『ブルジョワジーにおける不倫』の、「気質による不倫」の項においてゾラは、その気質が原因で不倫する妻を分析しているが、これは、いわゆるニンフォマニアとは趣を異にしている。ここではまず、自らの病に苦しむ妻があり、それを十分に理解しない夫という状況がある。夫に助けを求められないために、妻は不倫に走ってしまうのである。

> 妻は退屈し、1 日で 20 回も気分が変わり、理由もなく笑ったり泣いたりする。その結果、妻がどこもかしこも痛くて苦しいと嘆いても夫は肩をすくめ、最後には暴力的になる。不和はひどくなる。夫が文句を言わずに従い、観念して妻の犠牲者となることに同意した場合は別だが。ある夕べ、妻は愛人の腕に落ちる。性欲によって突き動かされたわけではまったくない、だが彼女は苦しみ、我を忘れているのだ[11]。

---

[10] « Femmes du monde », t. 10, p. 856.
[11] « L'Adultère dans la bourgeoisie », t. 11, p. 774.

つまり、ここで妻が不倫するのは、神経の発作によるものというよりは、夫と気持ちが通じ合えないことが一番の原因となっていることに注目したい。彼女は我を忘れた状態（folle）ではあるが、それだけが原因ではない。病んだ体や神経によって止むに止まれず不倫してしまうのではなく、彼女の苦しみを夫が理解しようとはせず、また彼女の苦しみに付き合うこともしなかったために、不和（désunion）はひどくなってしまった。ここでゾラは、夫をあからさまに非難することはしていないが、感情的に何も共有するものがないふたりの不和は、神経の発作よりも、夫婦にとっては危険なものであることを暗示している。それが、乱暴な初夜のせいであれ、妻への理解不足であれ、不和は結婚生活破綻への道なのである。

> 漠然とした不満が表に現れ、次に冷淡さが来て、最後には完全な断絶だ。夫婦に共通点はない。仲たがいしなかった夫婦は、完全な、そして相互の無関心を味わう。妻は独立した生活を送っている。自分の仲間、自分の楽しみ、自分の苦痛、個人的な財産を持っている。［中略］繰り返すが、わたしは多数派について述べているのであって、例外は省略している[12]。

ゾラは、こうした状態についてお互いの自由を尊重する、という肯定的な見方はしていない。夫婦がいつも別々に行動することは、すなわち気持ちが通じ合わないことを意味する。そしてそのような生活は、夫婦の関係の破綻につながっていく。互いの生活や感情に関心を払わないということは、喧嘩を繰り返すよりもずっと危険な兆候なのである。

4．理想的な結婚の条件

これまで、19 世紀の結婚の問題点を見てきたが、それでは、ゾラによれば、うまくいく結婚とはどのようなものなのだろうか。つまりそれは、前の引用の最後で「例外」とされている結婚である。記事を読み進めていくと、結婚がうまくいくためのいくつかの条件が導き出される。

まず一つ目は、一見ここまでの論と矛盾するようであるが、理性的に結婚相手を選ぶことである。理性的といっても、ただ利益ばかりを追い求めるという意味ではない。結婚に関して理性を働かせるというのは、感情に任せて相手を選ばないということである。そうした結婚は、結婚の目的が財産の維持や継承ではない人々、つまり継承すべき財産を持たない人々によく見られる。たとえば『人はどのように結婚するか』の庶民の項で登場するクレマン

[12] « Types de femmes en France », t. 8, p. 764.

スという造花女工は、ヴァランタンという指物師に熱烈なアプローチを受ける。『居酒屋』のジェルヴェーズと同じように、最初の男に手ひどい振られ方をして以来、男を警戒している彼女は、彼を拒み続ける。しかし、彼がプロポーズに踏み切ると、クレマンスは承諾してしまう。これまで彼を拒んできたのも、彼を嫌っていたからではなく、捨てられるのが怖かっただけだ、と言って。お互いに恋に落ちて結婚したふたりは、結婚式の当日、熱烈に愛し合う。

> そして、扉が閉まるなり、ヴァランタンはクレマンスを腕に抱き、顔を口づけで覆った。その情熱による乱暴さに彼女は笑ってしまう。彼女は彼の首にかじりつき、全身の力をこめて口づけを返して、彼女が彼を愛していると証明しようとする[13]。

上流階級の結婚では、初夜の乱暴さが暴力そのものでしかなく、花嫁を恐怖させたのに対し、ここでは「情熱による乱暴さ」は、情熱の激しさを物語り、花嫁を喜ばせるだけである。しかし、時が過ぎるにつれ、『居酒屋』のジェルヴェーズとクーポーとまったく同じように、ヴァランタンは給料を酒代で使い果たし、その影響でクレマンスも、酒を飲み始めるようになる。クレマンスも、ジェルヴェーズも、慎重な性格であり、結婚前は言い寄る男を理性的に諭しさえする。しかし、結局情にほだされて結婚してしまう。そして、短いハネムーン期間の後に残ったのは、喧嘩と貧困の日々であった。愛だけで結婚したふたりを罰するようにゾラが与えるのは、このように過酷な運命なのである。

理想的な結婚の条件として次に挙げられるのは、娘に実際的な知識をつけさせることである。表面的でおけいこごとのような教育ではなく、またある分野（性など）に関してはひた隠しにするような偏った知識でもなく、また社交生活のノウハウのみでもない。もっと現実的で、率直で科学的な事実、生活に直接役立つ知識を教えるべきである、とゾラは考えているように思われる。そして、現実的な知識を身につけることによって、理性的に結婚相手を選ぶことも可能になるのだ。『人はどのように結婚するか』で、父から二千フランの持参金をつけてもらっている中産階級のルイーズは次のような考えを持っている。

---

[13] « Comment on se marie », t. 12, p. 730.

> しかしルイーズは慎重な娘だ。彼女は一文なしの男とは絶対に結婚しないと明言している。所帯を持つのは、腕をからませて向かい合って見つめあうためじゃない。子どもだってできるかもしれない。年を取ったら、一切れのパンだけで我慢することになるかもしれない。だからわたしは、少なくとも自分と同じ二千フランは持っている夫がいいわ[14]。

ルイーズのように良識が働かせることができれば、親に言われるままでなく、言い寄る男性を、結婚相手として適切かどうか判断し、自分で結婚相手を選ぶことができる。また、彼女のように慎重で、実際的な物の考え方ができる女性は、夫の仕事の手助けをすることもできる。

実際、ゾラがうまくいく結婚の例として挙げている例は、どれもこの点において共通している。『ブルジョワジーにおける不倫』と対をなす記事『貞淑な妻たち』という記事でゾラは、タイトルの通り、不倫などせず貞淑な結婚生活を送るブルジョワ女性を、階層別に三つに分けて分析している。ここに描かれているのは、「夫と同じくらい活動的で良識を備えた、毎日の単調な生活における闘士であり真のヒロイン[15]」である。三人とも、それぞれの社会階層に応じた形で夫とともに働き、夫を支えている。

たとえば、比較的裕福な商人の娘の場合、結婚後すぐに父親が亡くなったため、夫と共に店を切りもりすることを余儀なくされる。

> まず最初の混乱していた時期は、夫がなんとか切り抜けられるよう助ける。やがて自然に、自分の好みから、と同時にまたその必要もあって、夫の仕事を分担し続ける。それぞれが自分の役割を果たし、そうなると店は二人の仕事仲間によって運営されているかのようだ。しかし、これほどに密接な利害関係を持ち、これほどに親密で愛情に満ちた友好関係を持つ仕事仲間がいるだろうか[16]？

このようなパートナーシップを築くことは、何より幸せな結婚生活の要である。彼女のように、夫の分身（un autre lui-même[17]）として、夫の仕事を肩代わりするというケースは極端な例と言えようが、少なくとも夫の仕事を理解することは必要である。ゾラがこの記事でパリの女性ばかりを取り上げているのも、このことと無関係ではない。地方においては、妻が夫の仕事を把握

---

[14] Art. cit., t. 12, p. 724.
[15] « Femmes honnêtes », t. 11, p. 777.
[16] Art. cit., t. 11, p.779.
[17] *Ibid.*

することは不可能だからである。ゾラによれば、地方では、女が男と同じように仕事をすると、人々の噂の的になり、変わった女だと非難されてしまう。

> そのため、地方の女性は、純粋な女の仕事から離れることがほとんどないのだ。地方の女性は受動的で、子ども、炊事、洗濯、ジャム作りにすべてを捧げている。［中略］妻は閉じ込められて暮らし、夫は妻をよそ者の目から守ろうとする。夫婦の離別はあまりにもひどいので、たいていの場合、妻は夫の活動をまったく知らない。パリではよく見られる夫婦が一緒に働いたり、行動する光景を見ることはほどんとない。地方は死んでおり、精彩を欠き、偏見に満ちている。そのため、地方では希望が抱けないのだ[18]。

ゾラによると、地方では、夫と妻が一緒に行動することがなく、夫婦がバラバラに生活しているという。妻は家に閉じこもり、夫と一緒に働くことはおろか、夫の仕事をまったく知らない状態にある。そのことが、人々から希望すら奪うほど、地方から活気を失わせているのだ。たとえば、『貞淑な妻たち』の有産階級（ここでは実業家と結婚した女性）の項で登場する女性は、普段は社交生活に明け暮れ、夫とは別々の生活を送っていると言えるが、その一方で、夫の仕事をよく理解し、適切なアドヴァイスを与えるという面も持っている。彼女は、社交の場から家に戻ると、「とても理性的で、理性と心の両方を開いて、愛する男にすべてを与える[19]」。先ほど引用した商店の妻が、夫と同じ「仕事仲間」として店の実務に携わっていたのに対し、この妻は現場で陣頭指揮をとったりすることはない。しかし、表には出ずに夫をサポートし、たとえ夫が不在の時でも、その助けがあくまでも目立たないように、「目に見えない手」として働く[20]。

> 夫は妻に仕事について話し、妻はそれに関心を持ち、関わるようになる。しかし、それはもはや皆の前で公然と行われる協力、つまり妻が人前で仕事に着手するというものではない。それは隠れた協力、控えめな手助け、夫がつらい時に支える支援と助言である。（夫が製鉄所にいる時）夫が不在の間は、そのようにして妻が見えない手となって指揮するのである[21]。

---

[18] « Types de femmes en France », t. 8, pp. 761-762.
[19] « Femmes honnêtes », t. 11, p. 781.
[20] こうした記述を見ても、ゾラが夫と妻が対等であることを理想としていたのかには、大いに疑問が残る。
[21] Art. cit., t. 11, p. 780.

このように、表立って店の経営を取り仕切ったり、助言によって陰ながら夫を支えたり、と階層によって夫の仕事への協力の仕方は異なるが、いずれも夫婦が協力して仕事をこなしている点は共通している。結婚生活を危険から守るためにもっとも大切なことは、ふたりで協力して仕事をすることである。なぜなら、家事・育児や社交生活と、仕事を両立させている妻は、忙しすぎて不倫をする暇などないし、また仕事を手伝えるほどの理性や良識を持っていればやはり不倫の心配はないからだ。記事の最後で述べているように、ゾラによれば、ブルジョワジーの不貞の原因は主に「愚かさと暇」（la bêtise et l'oisiveté）のせいである。妻が仕事に協力できるほどの理性を持ち、仕事に参加していれば、不貞を働く心配はなくなるというわけである。また、ふたりで協力して生活を営むことは、夫婦の絆を強めることに他ならない。

> 生活は共同で営まれねばならない、利益においても感情においても。なぜなら、ふたりで稼いだ金だけが、確固たる財産を築くからだ[22]。

利益と感情の両方を共有し、ふたりで協力して財産を築くこと、これがゾラにとって理想的な夫婦生活であると言うことができる。

5．理性と良識を育てるには？ —— 娘の育て方

ところで、どうすればこのような妻となる女性を育てられるのだろうか？三人の生い立ちに関して共通する点はあるのだろうか？　今まで扱ってきた記事の中で、理性や良識を持ち合わせていた女性たちを語る際にしばしば見られる記述がある。たとえば、『貞淑な妻たち』の商人の娘の場合、ゾラがあれほど非難する寄宿学校で教育を受けている。それにも関わらず、彼女は良識を備えた女性となるのだが、その理由は以下の通りである。

> 彼女はそこ（寄宿学校）でそれほど駄目な人間にはならなかった。気質のバランスのおかげである。そのしっかりした頭は人生を理解しており、そこでは両親のもうけ主義の欲求が洗練され、ある種の真面目な気品を帯びている[23]。

このほか、同じ記事の有産階級の女性の項では、「若い娘が自分の環境に耐え抜いて、健全な知性を持つことがある。おそらくそれは遠い複雑な遺伝からもたらされたものだろう[24]」と説明されている。また、労働者階級の娘た

---

[22] Art. cit., t. 11, p. 781.
[23] Art. cit., t. 11, p. 779.
[24] Art. cit., t. 11, p. 780.

ちに関する『彼女たちはどのように育つか』においてゾラは、例外的に売春に身を落とさずにすむ娘たちについて、次のように語っている。

> ある種の冷淡な気質、しっかりした頭、慎重で倹約家の性質の者が、結婚とかきちんとした生活といった昔からの夢を実現するために、言い寄る男たちをはねのけて、悪徳を免れるのをわたしは見た[25]。

まとめてみると、いずれも生まれつきの気質や、性格、あるいは遠い遺伝といった要素によって環境の悪影響を逃れたということになっている。ゾラにしては珍しく、それ以上の分析や質問を封じるような、あいまいな書き方である。それでは、たまたま生まれつき理性を備えた娘にしか幸せな生活を送れない、とゾラは書いているのだろうか。

しかし、そのような悲観的な結論を導き出す前に、考慮しなくてはいけない点がある。そもそも、これまで取り上げてきた19世紀の結婚における問題点は、おもに社会や家庭環境によるものであった。つまり、庶民やプチ・ブルジョワ階級の場合には、社会環境が整っていないために、十分な教育を受けられず、劣悪な住環境に置かれているという根本的な問題がある。ひるがえって裕福な人々はというと、結婚をビジネスとしか考えず、娘を商品として扱う。そもそも、上流階級の人々は、育児を人任せにして、母親であるということが、自分自身の生活を乱すことを良しとしない。上流階級の女性を扱った『社交界の女たち』で描かれているのは、「母性が、晩餐会や舞踏会と同じような豪華さの主題の一つ[26]」という女性である。

> もし赤ん坊が夜泣きしても、奥様には聞こえもせず、乳母があやすだろう。［中略］生活はこのように調整され、あまりに安楽なので、奥様は自分が母親だということに気づきさえしない。最初のうち、授乳には少し苦しんだが、やがて、いつも通りの暮らしを再開した。彼女は、友人たちを訪問し、外食し、劇場に行き、夜通し舞踏会で踊り、自分の娘によって一時間だって引き止められることはない[27]。

上流階級の母親は、子どもが赤ん坊の時にはその世話を乳母に任せ、大きくなってからも、教育は人任せにしている。そして、その教育はといえば、すでに述べたようにお粗末で、不幸な結婚の原因を作り出している。さらに嘆

---

[25] « Comment elles poussent », t. 11, p. 771.
[26] « Femmes du monde », t. 10, p. 854.
[27] *Ibid.*

かわしいのは、娘が母親を真似て育つということである。この記事で描かれている女性の娘は、ゾラの他の記事と同じように、結婚した後、夫とは別々の生活を持つ。

> 母親の例がそのように導くのだ。彼女は、自分が見た通りのことをするだろう。友人たちを訪問し、一日かけてもてなしをし、身づくろいに精を出し、金をごまかそうとする召使たちともめ事を抱え、冬が来るたびに何度か晩餐会や舞踏会を催すだろう[28]。

上流階級の母親は、上に述べたように子どもと接する機会がほとんどない。子どもが生まれるとすぐに乳母に委ね、教育にもほとんど関わっていない。それにも関わらず、このように娘に大きな影響を及ぼしている。あたかも母親がほどこした唯一の教育であるかのように。実際、母親はその存在自体が娘にとっての一種の教育なのである。「フランスの女性の類型」に次のような記述が見られるのもそのためだ。「母親が怒って文句を言おうものなら、娘たちは容赦なく応える。わたしたちはあんたの手本に従っただけだ、と[29]。」「手本」としての母親、という役割は、階級の別を問わない。母親の、それも悪い所は娘に受け継がれる。ここでは、母親の姿が反面教師となって、娘の人格形成に役立つということはない。母親という手本を娘はそのまま真似てしまうのである。

その意味では、有産階級でも、母親がいないことでかえって娘に教育的な効果を及ぼすこともある。母親がいると、娘を純潔に保とうと、無知に育ててしまうが、母親がいない娘は、周囲から知識を得ることを余儀なくされて、かえって世間に通じることもあるのだ。『人はどのように結婚するか』の有産階級の娘、マルグリットがその好例である。彼女は自分で結婚相手を決めた上、結婚の契約自体についても入念に目を通し、自分に不利益がないかを確認してからサインする。こうした入念さは、経済的に余裕のある家に生まれた娘には珍しい態度であり、母親に守られて育った娘には見られないものだ。同じ記事の前の項のマクシムとアンリエットの結婚契約が結ばれる場面とは対照的である。「観察もせず、微笑みとともにペンを渡しながらサインする[30]」という描写には、契約の条項をよく見もせず、微笑みながら契約を交わすアンリエットが描かれている。結婚の契約という重要な場面にありな

---

[28] Art. cit., t. 10, p. 856.
[29] « Types de femmes en France », t. 8, p. 757.
[30] « Comment on se marie », t. 12, p. 718.

がら、もっぱら相手方の目に自分が優雅に見えることだけに気を使っている彼女の姿には、現実を教えず社交術だけを仕込むという母親の教育が結晶しているといえるのではないだろうか。

社交術を教えるだけの母親の教育もさることながら、そもそもゾラは娘の教育自体が軽視されていることに絶望を抱いているようにも思われる。さきほどの引用のアンリエットを結婚相手として選ぶ際に、マクシムの家族が彼女を評した言葉が以下の通りである。

> 教育については話さない。そんなことは無益だ。母親によって育てられているというだけで十分ではないか。性格に関しては問題になるはずがない。誰も知らないのだから[31]。

このように見ていくと、確かにゾラは19世紀の教育には憤りを隠せず、当時の一般的な親、とりわけ母親に失望している。では、ゾラはいったいどのような母親が望ましく、そしてどのような親子関係にすべきであると考えていたのだろうか。

理想的な母親像や育児法などについて具体的に記した箇所は見当たらないが、先に引用した箇所からある程度類推することは可能である。母親の姿がそのまま手本として娘に真似られてしまうということは、母親が良い手本とならなければならないということである。たとえば以下の記述などがそれを証明している。

> 彼女は薄暗い部屋の隅で育ち、朝から晩まで日々の糧のための過酷な戦いを目撃する。［中略］十スーを稼ぐために何時間もがむしゃらに働く両親の姿をたえず目撃して身についた生への粘り強さが、その灰色の澄んだ目を見るだけで分かる[32]。

両親が真面目に働いていれば、子どもたちはその姿を見て真似るようになる。薄利な商売でも勤勉に毎日働き続ける両親を見て育った彼女は、商売をしながら、女中も使わず家事と育児もこなすという奇跡をやってのけるのだ。とはいえ、いくら一生懸命働いていても、その姿を子どもが見ていなければ意味がない。両親が勤勉に働くこと、そしてそれを子どもに間近に見せて育て

---

[31] Art. cit., t. 12, pp. 717-718.
[32] « Femmes honnêtes », t. 11, pp. 777-778.

ることが、子どもに与えられる最良の教育の一つであるといえるのではないだろうか[33]。

終わりに

本稿では、結婚や夫婦関係に関してゾラの主張をたどってみた。まず、ゾラが糾弾したのは功利的な結婚であり、娘を無知のまま結婚させ、そもそも娘の教育を軽視する親であった。またゾラは、感情のままに結婚相手を選ぶことの危険も示唆している。言い換えるなら、政略結婚というのは、貴族が家名と財産を守るために行ってきた伝統であり、ゾラは記事のなかで上流階級の人々の結婚を通して、アンシャン・レジームが終わって久しいのに、旧態依然とした伝統にいまだにしがみつく貴族という階級を象徴的に、また皮肉的に揶揄しているようにも思われる。そして、感情のままに所帯を持ち、徐々に生活ごと崩壊していく労働者階級の人々の結婚は、社会構造によって救いようのない貧困に閉じ込められ、つかの間の喜びを得るために欲望を満たしてそのことに無反省にならざるを得ない労働者階級の悲惨な状況をそのまま反映している。

そのように考えてみるなら、ゾラが、少なくとも糾弾の手を休める結婚の形、つまり夫婦が協力して働き、妻が理性と良識を備え、夫婦が感情と利益の両方を共有するという夫婦生活は、ブルジョワ階級特有のものであると言える。18 世紀以前までの政略結婚ではなく、かといって自由恋愛のみによる偶然に任せた結婚でもない。「理性的な恋愛結婚」とでもいうべき結婚の形は、結婚観や家族観が変化しつつあった 19 世紀という時代だからこそ生まれた考え方であろう。また、理性と良識を備えた妻、というイメージには、ゾラを支え続けた妻、アレクサンドリーヌの姿が重ならないこともない。

いずれにせよ、ゾラが記事の中で述べた結婚の形を実現するのは簡単なことではない。夫婦で感情と利益の両方を共有する、というのは、理念としては理解できるが、あまりにも理想的な夫婦像にも思われる。しかし、30 年以上にわたって、時には穏やかならざる結婚生活を経験したゾラは、もちろん結婚に関して夢物語や机上の空論を展開して満足していたわけではない。1884 年のナケ法成立による離婚の復活に寄せて書かれた『離婚と文学』という記事でゾラは次のように述べている。

---

[33] ただ、ゾラの考える育児や親子関係の問題に関しては、これらの記事だけではなく、小説作品も用いながら、今後さらに検討していきたい。

> 結婚したら、一番良いのは、わたしが思うに、自分の家の中で折り合いをつけ、可能な限り最良な結婚生活を送ることだ。［中略］お互いを大目に見ることを知ることが必要だ。ふたりの人間が継続的に共に暮らせば、不愉快なことの連続なのだから。人生は悲しいものであって、愚かさや悪辣さがそこらじゅうにある。したがって、自分の運命に満足し、出来る限りの理性を用いてそれを改善するよう努め、とりわけ、どこでも苦しみというのは変わらない、だから完璧な至福をよそに試みても実際には利点などありはしないのだ、と自分に言い聞かせるべきだ[34]。

ふたりの異なる人間が共に暮らしていくことについて理想的なあり方を述べる一方で、この記事においてゾラは、きわめて現実的な意見を披露している。ありもしない完璧な幸福を夢見ることは、『ブルジョワジーにおける不倫』に登場した、恋愛小説の主人公に恋して不貞をおかす愚かな人妻のようなものである。ゾラは、この記事にあるような現実主義者としての一面も持ち合わせている。しかし、理想的な夫婦像を語ることで、結婚にあえて希望を持たせたのではないだろうか。夫婦がバラバラに生活しているため「偏見に満ち、死んでいる」上流階級でもなく、社会の仕組が崩壊しなければ決して救われないであろう労働者階級でもなく、自らの手で生活を築き、真面目に働けば年金ももらえるブルジョワ階級だけが、努力によってそれを実現できると信じながら。

[34] « Le Divorce et la littérature », t. 11, p. 782.